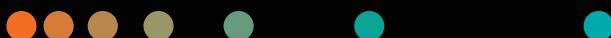


POCT管理するために QMSを見直してみよう —スタッフの負担軽減と 理解を得られるためには—



www.siemens-healthineers.com/jp



日本医療検査科学会第57回大会 ランチョンセミナー2

日 時：10月3日(金) 12:00～12:50

会 場：第2会場(パシフィコ横浜会議センター 5F 501)

座 長：加藤 千秋 先生

(名古屋大学医学部附属病院)

演 者：山下 計太 先生

(浜松医科大学医学部附属病院検査部)

本ランチョンセミナーは整理券制となっております。

9月1日～9月12日までの事前参加登録をすると、登録時にランチョンセミナーの整理券事前予約もおこなえます。

事前申し込み後の残数につきましては、会期当日の朝に配布を行います。

整理券及び当日の配布スタッフは、日本医療検査科学会第57回大会にて、対応させていただきます。

詳細は日本医療検査科学会第57回大会のホームページをご確認ください

※整理券の予約・配布はいずれも無くなり次第、終了とさせていただきます。

共催：日本医療検査科学会第57回大会
シーメンスヘルスケア・ダイアグノстиクス株式会社



POCT管理するためにQMSを見直してみよう —スタッフの負担軽減と理解を得られるためには—

山下 計太 先生

浜松医科大学医学部附属病院検査部

セミナー概要

検査室の最近の悩みとして、POCT管理・運用方法が挙げられる。これまで、検査室の運用や精度管理方法などは多くの経験・知見を得ているが、POCTとなると、「さてどうしようか?」と行き詰まるケースは良く見受けられる。2000年以降、本学会のPOC推進委員会(現POC技術委員会)の功績によりPOCTは普及してきた。しかしながら、検査室と病棟・外来など検査室外の診療現場との関係性は各医療機関で異なり、なかなか多職種連携の活動が進まないのは、国内の検査室の在り方も一因かもしれない。海外に目を向けると、韓国・台湾など近隣の国々では、チーム医療としてPOCT管理が根付いている。特に、これまで検査室が築いてきた精度管理に注力するスタイルより、使用者への教育と力量評価について、チーム運営と組織の構築方法、医療DXの活用方法など、まさに検査室のQMSに準じた活動内容となっている。チーム医療やタスクシフトへの貢献、ISO15189取得など国内トレンドとマッチしており、QMSを見直すことで、POCT管理の副次効果を得られるのではと考えられる。さらに昨今の働き方改革、多様性、人口減少などの課題からスタッフの負担軽減策もPOCTに必要なものと感じている。精度管理の運用方法も重要な一つの項目だが、我々が実践しているシステム活用やスタッフ配置方法など現場に近い話を含めて、本セミナーでは、私たちのQMSに関する活動に関して、苦労話をお伝えしたいと考えている。